

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の3年目)

1. 研究課題

人物で見る第二次世界大戦

The Second World War in Personal Perspectives

2. 研究代表者氏名

林田 敏子

HAYASHIDA, Toshiko

3. 研究期間

2022年4月-2025年3月(3年目)

4. 研究目的

2007～2015年に人文研で行われた第一次世界大戦についての共同研究は、国内外から注目される成果を少なからず生んだが、しかし、「現代の起点」となった「未完の戦争」たる第一次世界大戦がいかなる「現代」を現出させたのか、という問いは依然として残されている。とりわけ、僅か20年の時を隔てて再び惹起されたもう1つの世界大戦の理解を抜きに、「現代」を語りえないことは論を俟たない。本研究班は、第一次世界大戦研究のそれのみならず、「人文学 beyond 2020」を精力的に議論してきた「21世紀の人文学」班の成果をも引き継いだうえ、この間次々と発表されている世界大戦の世紀に関する最新の研究に基づいて、終戦から80年を控えた第二次世界大戦の新たな全体像を構築し、混沌とした現代世界を把握するための見通しを提示することを目的とする。その際、本研究班では、ヒューマン・ファクターに着目して第二次世界大戦を検討する方法を採用する。第二次世界大戦の理解にあたって重要な論点にかかわってくる特定の人物に則して、この戦争を特徴づける諸側面を浮き彫りにする、との意図からである。

The First World War, the foundational event of the modern world, was examined in the research project, 'A Trans-disciplinary Study of the First World War', conducted at the Institute from 2007 to 2015. A vital question to be inquired next: What kind of modern world emerged out of ashes of the First World War? In tackling this question, a comprehensive reconsideration of the Second World War, another global convulsion within twenty years since the end of the first, is absolutely essential.

The research project attempts to draw a fresh and updated overall picture of this traumatic catastrophe with an emphasis on the human factors. As Ian Kershaw points out, the Second World War was 'a war of apocalyptic proportions', which certainly brought 'an assault on

humanity unprecedented in history'. Especially the genocidal mass murder of Europe's Jews was 'the lowest point of mankind's descent into the abyss of inhumanity'. Therefore the task, raised by Timothy Snyder, 'turning the numbers back into people', is acutely posed to all of us as researchers and humanists. Human perspectives adopted by the project could be meaningful in challenging this formidable task.

5. 本年度の研究実施状況

2024 年度は計 9 回の研究会を開催した。最終年度ということもあり、いずれの報告も個々の班員による単著執筆を意識した研究報告となった。第二次世界大戦を再考し、通説の修正を迫るポテンシャルをもつ論点としてこれらの報告がクロース・アップしたのは、中立、庶民生活、小国、時期区分、生物（非人間）、転向、「戦後」との接続、武器としての食糧、等である。そして、これらの論点を顕在化させるうえで、本研究班が採用した個人への着目という手法が有効であることも再確認された。また、10月 21 日には、特別例会として、国際研究ミーティング Post-Imperial Patterns in Central and South-Eastern Europe を開催した。報告者の Catherine Horel は国際歴史学会議のプレジデントの要職を務める有力な歴史家であり、遠隔地からの参加者を含め、学内外から多くの出席者を得た。

6. 本年度の研究実施内容

- 2024.4.27 人物で見る第二次世界大戦 中立国の第二次世界大戦経験 発表者 小関隆
2024.5.11 同上 主婦、49歳 発表者 林田敏子 奈良女子大学
2024.7.27 同上 背の高い人のたたかい方 発表者 小山哲 文学研究科
2024.10.5 同上 昆虫採集・植民地・戦争 発表者 瀬戸口明久
2024.11.2 同上 コミュニストたちの戦時体験 発表者 福家崇洋
2024.12.14 同上 ヘンリー・A・ウォーレスの第二次世界大戦 発表者 中野耕太郎 東京大学
2025.1.26 同上 李承晩と朝鮮半島の第二次世界大戦 発表者 小野容照 九州大学
2025.2.22 同上 台湾・塩分地帯における 3 つの戦争 発表者 駒込武 教育学研究科
2025.3.1 同上 アルフレート・C・テプファーの光と影 発表者 藤原辰史

7. 共同研究会に関連した公表実績

6月 6、13、20、27 日に、人文研アカデミーの企画として、連続セミナー「第二次世界大戦再考」を開催した。オンラインなし対面のみの形態をとったが、各回とも参加者は 100 名を超えた。また、京都新聞（6月 12 日付け）にも報道された。

8. 研究班員

所内

小関隆、岡田暁生、藤原辰史、瀬戸口明久、福家崇洋

学内

小野寺史郎(人間・環境学研究科)、駒込武(教育学研究科)、小山哲(文学研究科)、金澤周作(文学研究科)

学外

林田敏子(奈良女子大学研究院生活環境科学系)、中野耕太郎(東京大学総合文化研究科)、小野容照(九州大学人文科学研究院歴史学部門)、浅井佑太(お茶の水女子大学 基幹研究院人文科学系)、橋本伸也(関西学院大学文学部)、久保昭博(関西学院大学文学部)、立石洋子(同志社大学グローバル地域文化学部)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数				延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	
			(40歳未満)	(35歳以下)	(0)			(0)	(0)	
人文研所属 (内女性)	1	8	0	0	0	0	32	0	0	0
		(2)	(0)	(0)	(0)	(0)	(4)	(0)	(0)	(0)
京大内 (人文研を除く) (内女性)	3	8	0	0	1	3	28	0	0	5
		(3)	(0)	(0)	(1)	(0)	(9)	(0)	(0)	(5)
国立大学 (内女性)	4	4	0	0	0	0	18	0	0	0
		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(1)	(0)	(0)	(0)
公立大学 (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
私立大学 (内女性)	2	4	0	0	0	0	16	0	0	0
		(2)	(0)	(0)	(0)	(0)	(8)	(0)	(0)	(0)
大学共同利用機関法人 (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
民間機関 (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
外国機関 (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
その他 ※ (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
計	10	24	0	0	1	3	94	0	0	5
		(8)	(0)	(0)	(1)	(0)	(22)	(0)	(0)	(5)

※「その他」の区分受入がある場合
具体的な所属等名称を記載：例）高校教員
無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数		うち国際学術誌掲載論文数	
	発表者数	論文数	発表者数	論文数
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	6	(6)	0	(0)
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0	(0)	0	(0)
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0	(0)	0	(0)

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適當ではない分野等

	雑誌名	掲載論文数	掲載年月	論文名	発表者名
1	『お茶の水音楽論集』第24巻	1	2024.4	「20世紀「新音楽」における作曲コンセプトと創作プロセスの関係——バルトーク《ミクロコスモス》第141番〈イメージと反映〉とウェーベルン《弦楽四重奏》作品28の比較を通して」	浅井佑太
2	『人文学報』122号	1	2024.6	「レールに身体を横たえて——鉄道自殺の技術論」	瀬戸口明久
3	石川禎浩編『20世紀中国史の資料的復元』京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター	1	2024.7	「戦後日本の中国近現代思想研究の歴史に関する資料的考察」	小野寺史郎

4	Asterion [en ligne], 30, 2024, mis en ligne le 12 septembre 2024, URL : http://journals.openedition.org/asterion/10909 ; DOI : https://doi.org/10.4000/12b0v	1	2024.9	« Une Impossible guerre d'avant : l'écriture et la mémoire dans La Comédie de Charleroi de Pierre Drieu la Rochelle »	久保昭博
5	『農業経済研究』 96(2)	1	2024.9	農業経済学のポテンシャル—歴史から考える—	藤原辰史
6	朱琳、渡辺健哉編著『アジア遊学 299 近代日本の中国学——その光と影』 勉誠社	1	2024.11	「近代日本の中国学の系譜」	小野寺史郎
7	『西洋史研究 新輯』 第 53 号	1	2024.11	「ロシアにおける全体主義論とファシズム論」	立石洋子
8	『〈家族〉のかたちを考える②家族と病い』	1	2024.12	「コロナ・パンデミックによる政治と社会の重症化」	藤原辰史
9	藤原辰史・香西豊子編『疾病と人文学』岩波書店	1	2025.2	「「軍事空間」としてのパンデミック—COVID-19 とマラリア」	瀬戸口明久
10	『歴史評論』898 号	1	2025.2	「ジェンダーの視点から考える警察史」	林田敏子
11	『女性とジェンダーの歴史』第 12 号	1	2025.2	「性の抑圧から解放へ？—女性同性愛とインテセクショナリティ」	林田敏子
12	石井洋二郎・鈴木順子編『リベラルアーツと芸術』水声社	1	2025.2	「音楽論は文明論たりうるか？」	岡田暁生
13	長谷川貴彦（編）『サッチャリズム前夜の＜民衆的個人主義＞：福祉国家と新自由主義のはざまで』岩波書店	1	2025.3	「「許容する社会」、モラルの再興、マーガレット・サッチャー」	小関隆

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

	研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名	国際共著
1	中学生から知りたい パレスチナのこと	岡真理・小山哲・藤原辰史	2024.7	ミシマ社	
2	台湾と沖縄	駒込武	2024.10	みすず書房	
3	20 세기 아메리칸 드림: 전환기부터 1970 년대까지	中野耕太郎著、イ・ヨンビン訳	2024.10	한울아카데미	
4	ホロコーストとジェノサイド	オメル・バルトフ著、橋本伸也訳	2024.11	岩波書店	
5	1インチの攻防	M.E. サロッティ、立石洋子ほか訳	2024.12	岩波書店	
6	疫病と人文学	藤原辰史・香西豊子	2025.2	岩波書店	
7	記憶の戦争	橋本伸也	2025.3	名古屋大学出版会	

12. 博士学位を取得した学生の数

なし

13. 研究成果公表計画および今後の展開等

本研究班の成果報告は、通常の論集ではなく、個々の班員の単著を双書として連続的に刊行するかたちで具体化される。人文書院との間で、2026年3月刊の3冊を皮切りに、計16冊の単著を刊行する計画が合意されている。こうしたやり方は上述の第一次大戦班の前例があるが、通常の論集が多くの読者を得ることがますます難しくなりつつある現状において、比較的コンパクトな単著をシリーズで世に問う手法には、成果公開の新たな可能性を切り開く意味があるものと期待している。